

黒孔雀は囚われる。

純反長幸
伊祖子久美

R-18

The image features a purple background with a repeating pattern of peacock feathers. Overlaid on this are several thick, black, abstract, wavy lines that resemble ink splatters or brushstrokes. The text 'a bullet.' is centered in the lower half of the image.

a bullet.



黒くろ

囚とら孔く

わ雀や

れは

る。

S
I
D
E
S

原作
作画
・
伊純
祖友
子良
久幸
美



この本は「成人向け」です。
購入者が18歳以上であるという申告の元に頒布しております。
よって18歳未満の購入、閲覧を禁止します。

内容はすべてフィクションであり、実在のいかなる人物、団体とも
関係ありません。



「もっど…っど
痛^{きもちいい}いこと もっど…っど
「…っど」





どうした泉？

これよしの祝？

はいよ

おおがき大垣さん



先輩？

んー？



酔った♡



飽きないよ？俺面食いだし

あーあーこいつらにそんなこと言うから

あ！そうだ



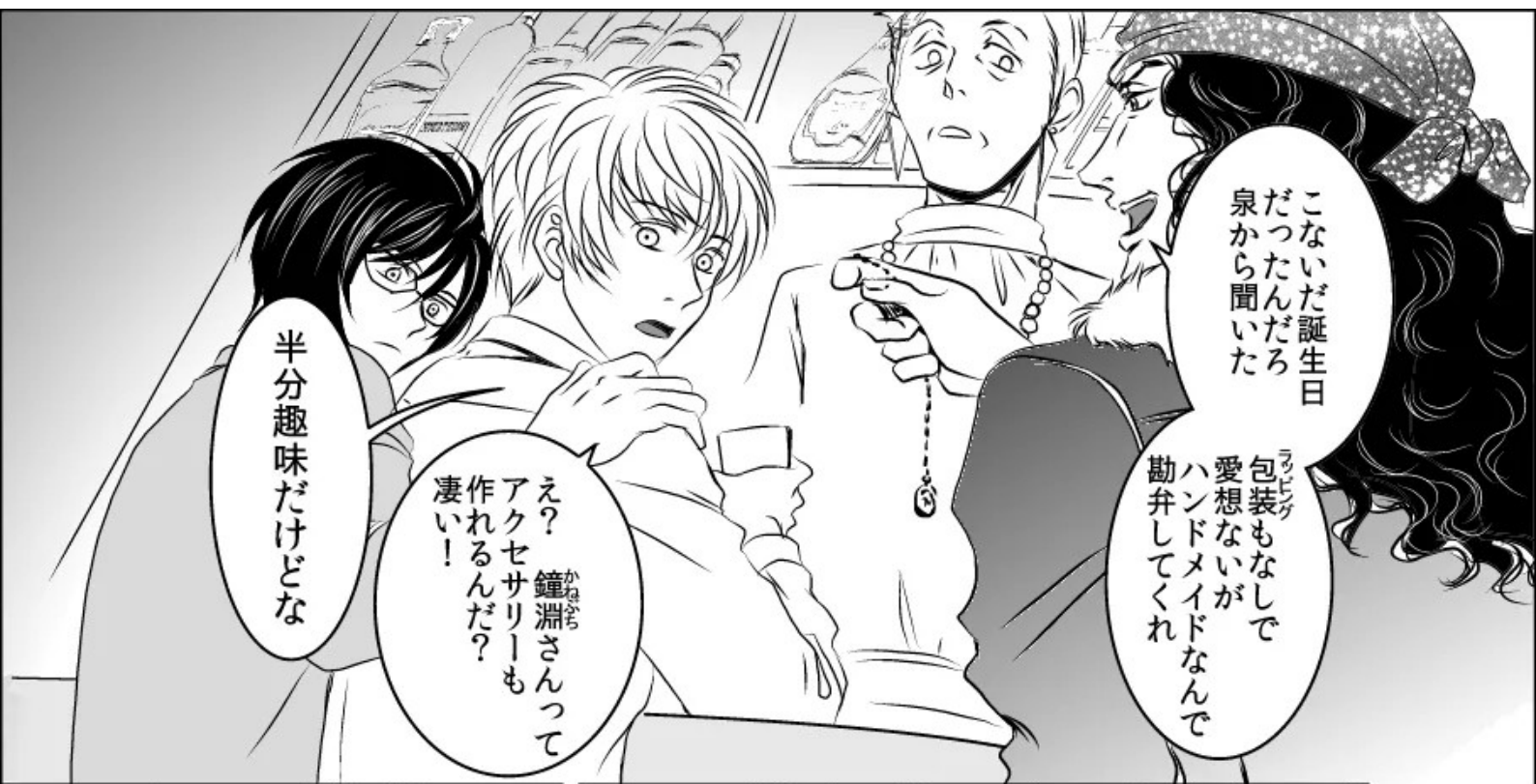
あんたたち職場の同僚ってことは朝昼晩一緒なんでしょ？

よく飽きないわねえ



黒孔雀は囚われる。

SIDE_S



半分趣味だけだな

え？ 鐘淵さんって
アクセサリーも
作れるんだ？
凄い！

こないだ誕生日
だったんだろ
泉から聞いた

包装もなしで
愛想ないが
ハンドメイドなんで
勘弁してくれ



マハーマー
ユーリーの
梵字だ

かつこいい♪
これサンスクリットって
いうんでしたっけ？



孔雀に
乗ってる

仏教では厄災と
苦痛を除く明王で
.....

元はな

インドの
神様ですか？





.....
誰からか
知りたいか?



.....
別に?



拘束キライ
やつてみたいなら
自分で買って来て



俺の工具箱
だからね♪

よくこんなもの
平気な顔で
持ち歩けるな〜

手錠とか
縄とかは
ないのか?





……
そろそろ
いいか?

はぁ?
あぁ?
あぁ?



それが
イイんだよ

……あんだだっつ
俺を叩きながら
こんなになってる

あ……



『もう』って
お前……ケツ
真っ赤だぞ?
平気なのかよ?

……もう
おわりなの?



お前がイイ声で
煽るからだろ



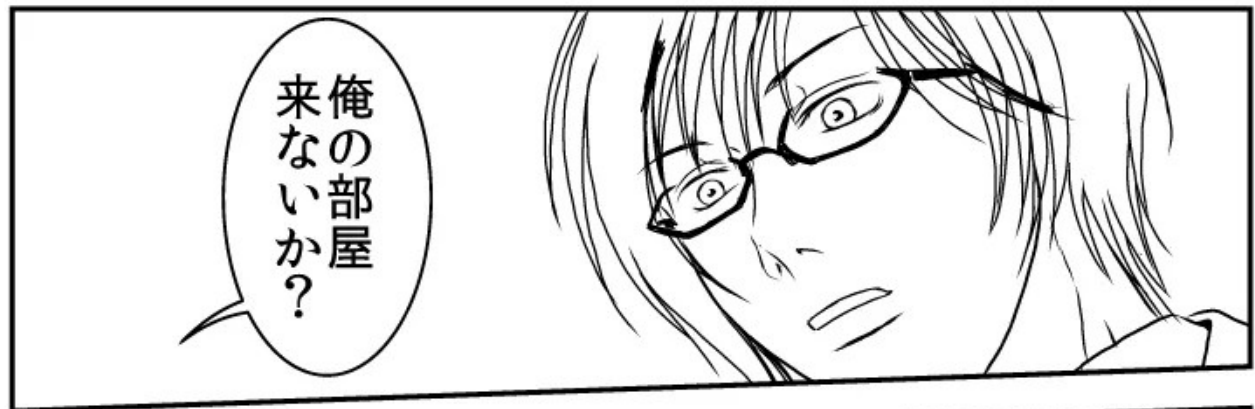
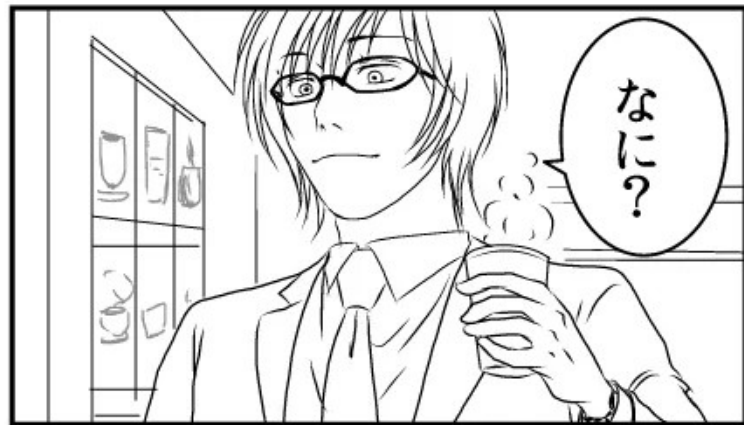
泊まってけば
いいじゃん

うわ
こんな時間!
終電間に合うかな



……ん……







ポテト!
チョコ!



泊まっ
てけよ



ゴムなら
ウチにある



恥ずかしいの?



——うん
後で家に電話入れる



あははは...

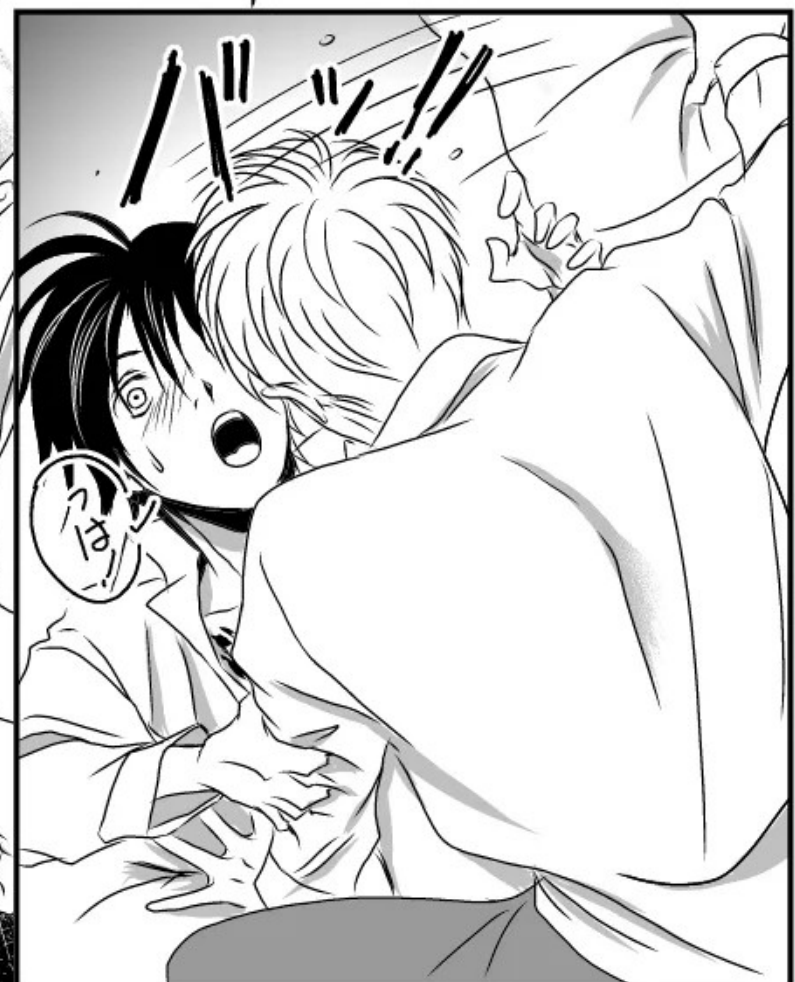
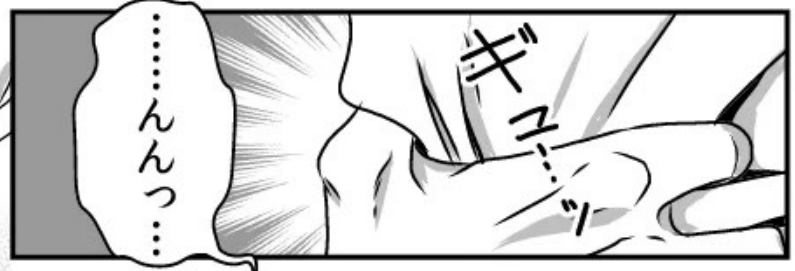
袋わけ
ますか?

全搭
じいちゃん!!











可愛いの祝……



……あつ……ん！……！



ああ……
せんぱ……いつ

じゅわ
じゅわ
ちゅわ



……上手に

なったね……



……ん……！



黙れ



あ...い...
ガイッ

痛いこと
もっ... っ...

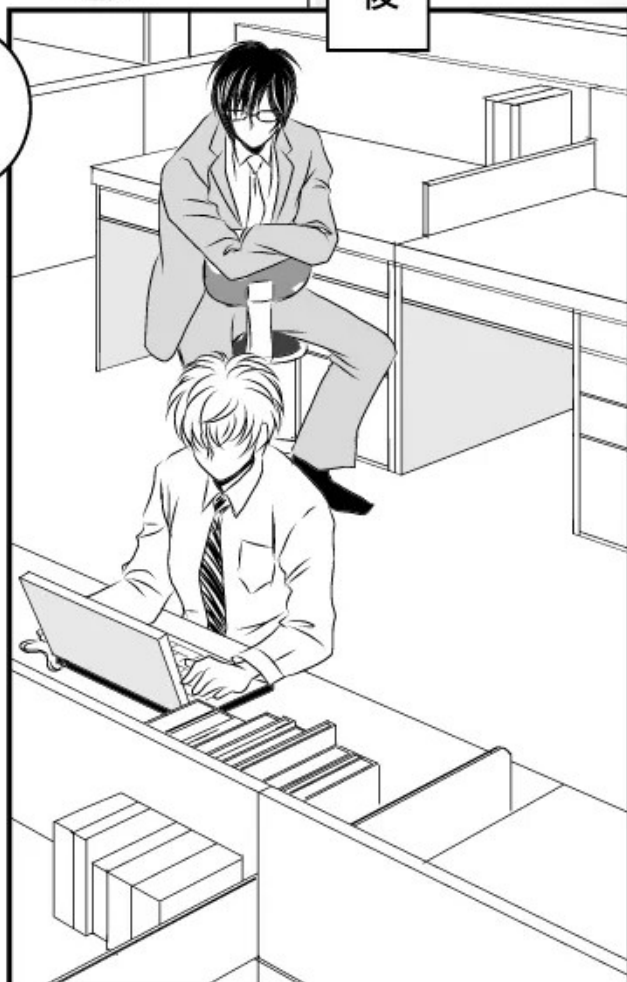
もっ...
っ... っ...

もっ...
っ...

ちゅ
ちゅ
ちゅ



数日後







……何を
彫ったの？

髑髏と
青薔薇

『再生』と『ありう
べからざるもの』
って意味がある



フチ
鐘淵
俺帰るよ

先輩遅いし
なんか邪魔そう



お話中
すみません

天野俊樹さんに
ついて何か……

俺
面識ないんで



そこまで送る

何？
気持ち悪い

いいから
送らせろ



お前、今の男に
すっかり
捕まえてて貰え

万が一
あいつと別れても
恨みを買うような
遊び方はするな



何
に…
急

他人のこと
言えない
遊び人の癖に—



どうしたんだよ？
らしくないな

—解った解った



寒っ！

……
泉



お客さん？
どうされました？



To
Name
先輩の部屋で待ってます



すみません
もう少し
行って下さい



.....

SIDE-Mへ続く

「梟は希^{ねが}う」

伊祖子久美

先日、久々に家族三人揃ったとき、お袋が生まれ故郷のロシアの永久凍土から発見されたミイラを見て来たのだ、と語った。親子でレストランで飯を食いながら古代人のミイラやら骨の話はどうかと思うが、人類学者であるお袋にとっては日常会話だ。古代において、非常に高貴な存在であったと思われる二十代の女性と、その護衛役として殉死したと思われる戦士のミイラが発見され、その肌には精緻なタトウーが施されていたのだと言う。

「素晴らしかったぞ。見てみたいだろう？」と、お袋は興奮気味に言った。

二千五百年前のタトウーのデザインは興味深いが氷漬けのミイラの皮膚に残ったものは余り見たくない。タトウーは瑞々しく息づいている肌にあつてこそそのものだと思ふ。

「タトウーというものは、古今東西、どの時代、どの地域にでも文化として存在している」

知ってる。釈迦に説法だ、俺は彫師だぞ、と言ったが聞いちゃいない。

タトウーは、ときに敵対する存在への威嚇であり持ち主が所属する共同体での地位の証明であり、刑罰であり、装飾^{ファッション}であり、信仰や憧憬や思想を示すものでもある。

俺の客の中で、そのうちのどれでもない理由でタトウーを入れた奴がいる。

泉がタトウーを入れてみたいと思った動機は「針や鑿で皮膚を刺されるのってどんな感じなんだろうって思ってた」だったらしい。

綺麗な顔をして、奴は真性のドMで、ド変態だ。

そして、身体はMだが、精神的には、人を惹きつけて振り回した拳句に地獄に蹴落とし、それを見て楽しんで笑う性質の悪いドSだ。

何年か前、男に道端で土下座され「捨てないでくれ！ 一体、私は君にとってなんだったんだ！」と泣き喚かれた泉は、愉悅の表情を浮かべて言い放った。

「期待してたのに小さかったし、あんまり気持ちよくなかったし、もう飽きた。バイブの方がまし」

その後、界限で見かけなくなつたが、あの男は無事に立ち直れたんだろうか。

泉が俺を友達扱いする理由はよく解らない。が、少なくとも、バイブと機能を比較される使い捨ての男よりは、まだましな存在だと思う。

泉は、いつも突然訪ねて来る。

この間も、新宿で買い物をしたついでと言って俺の自宅兼スタジオにやって来た。

デパートのロゴ入りの手提げの紙袋を二つ持っていて、そのうち一つは俺への手土産の生ハムだった。後でビールのつまみにしたらめっちゃくちゃ美味かった。

もう一つは？ と尋ねると、大垣への誕生日プレゼントだと聞いた。
訊くんじゃなかった。

「内緒にしてよ？」 俺、大垣さんの誕生日知らないことになつてゐるんだから」

あいつに、まっとうな恋人が出来て、サプライズでプレゼントなんて普通のことをするようにするのは思わなかった。

最初は、容姿こそ悪くないものの、こんな素人くさいガキ——実は泉と同じ年だったが——で、泉が我慢出来るのかと思つたもんだつた。

「悪い虫は騒がないのか？」

そう尋ねると、泉は折角入れてやつたコーヒを一口飲んで不味い、と言いやがった後で問い返した。「悪い虫？」

「クソピッチがおとなしいから病気かと思うだろ」「ん？ 俺は相変わらず自他共に認める淫乱^{ピッチ}だけだ？」

他人はともかく、自分で認めるなよ。どうしようもねえな、こいつは。

「隠れて遊んでんのか。まあ、そうだろうとは思つたけどあいつには見つかるなよ。ありや多分キレるタイプだし、ノンケで素ツ堅気のエリート様の人生をめちゃくちゃにしてやんなよ」

「他とは遊んでないよ。之祝一人で間に合つてるだけ」

……あの坊やのバイブとしての機能もお気に入りな訳か。双方お幸せで結構なこつた。
惚気るだけ惚気て、泉は帰って行つた。

大垣は泉が引つ掛けた男の中じゃ一番だ。何度か一緒に飲んで、気のいい奴だと解つた。

俺のように年中深酒をする訳じゃないから余り知られていないが、泉は見かけによらず酒には強い。一晩中飲んでも泥酔することは滅多にない。

奴の男関係を中心に散々苦労させられながらも、なんだかんだで長いつきあいになつたのは、泉が朝まで俺につきあつて飲める数少ない相手だからかもしれない。

その泉が、大垣と一緒に奴の肩にしなだれかかる。

初めて三人で飲んだ居酒屋でも、泉は大垣に凭れて「酔つた」と言つた。その割にペースは落ちないし話す内容も普通だ。

真に受けて心配した大垣に「大丈夫か？ 烏龍茶にしとけ」と言われて「やだ」とか駄々を捏ねてる。酔つてるはずがない。俺と一緒にボトル数本空けて平然としている泉が、一軒目のビールの二杯や三杯で酔う訳がない。……いや、酔つてるか。うつとりとためいきなんかついて別のものに酔つてる。

大垣は本気で心配して「気分悪いか？ もうやめとけ」と言い、泉は御機嫌で「いいだろ。限界まで飲んで、あんたが一緒なんだし」と、俺なんかそつち

のけでいちやついて——と思つたら、大垣に寄りか
かつたまま、俺を見てた。

「羨ましいだろ？」とでも言いたげな自慢らしい
笑みを浮かべてくすくす笑う。

そして、酔つ払つたふりをして泉は言つた。
「俺、女に生まれた方が良かったかなあ？」

耳を疑つた。泉は生粋混じりつけなしのゲイで
女役だが、女装もしないし、女言葉を使つたのを聞い
たことさえ一度もない、男として男が好き男だ。

問われて大垣は「なんで？」と訊いた。

「あんたノンケだし」
「男でいいよ。……お前が女なら俺は本当に最低じゃ
ねえか」

大垣と初めて逢つたとき、泉は「この男に脅迫され
てる」と言つてたが、泉がそんな玉な訳はない。嫌い
でない限り誰とでも寝るが、鬱陶しいと思つたが最
後、泉は一瞬たりとも我慢なんかしない。

気に入つた男を落とすためには何処までも媚びて
口説くが、短ければ一晩、長くても二カ月ほど
で飽きて、あつさりど振る。それ以上長続きしたのを
見たことがない。

別れたがる泉に、往生際悪くつき纏うようなら俺
の出番だ。

泉から「ねえ、鐘淵。助けて」と連絡が来なかつたつ
てことは、間違ひなく状況を含めて楽しんでいたはず
だ。

しかも、俺に『彼氏』だと紹介した。
こんなことは今まででなかつた。

——誕生日か。

俺は、抽斗を開けて小さな銀粘土の塊を取り出し
た。何か月前に、自分用の指輪を作つた後で残つた
分だが、幸いまだ乾燥していなかった。

孔雀は、西洋では墮落と驕慢を象徴し、中東の山岳
民族は人を救うために神に叛いて地に墮ちた天使
として敬い、仏教では破邪を意味する。

銀粘土を木篋で伸ばし、スパチュラで成型し、表面に
孔雀明王クワンイノウを意味する梵字を入れた。

人々の厄災や苦痛を取り除くとされる孔雀明王は
荒々しい憤怒の表情の明王の中で唯一慈悲深き
菩薩の貌をしている。

梵字だけでは少しシンプル過ぎる気がしたので
一番小さいスパチュラで孔雀の羽根を作り、罫書き
針で引つ掻いて模様をつけ、オープントースターに
入れて焼成した。

大垣が気のいい奴なのは確かなのに、時々ムカつ
くのは俺が泉から受け取り損ねたような気がして
ならないものを全身に浴びてゐるせいだろう。

泉は友達でいる限り義理堅い奴だから、奴にも
愛情は多分あると思つていたが誠実や献身がある
とは知らなかつた。

泉は幸せそうだ。

大垣は情が深くて見場も悪くない。多分、泉が今の
ところ大垣に対して誠実でいられるのは、大垣自身
が泉に対して誠実だからだろう。泉とつきあうのは
苦労が多いだろうが、出来るだけ長く幸せであると
いい。

金を取って商売でやってることだし、そんな柄じゃないのは百も承知だから口に出しては言わないが、俺はタトウを彫るときには持ち主の護符たれと願いながら針を刺している。

俺が秘かにこれまで俺が彫った中では一番いい出来だと思っているあの黒い孔雀のタトウは当初は殆ど意味のないものだった。今は、大垣が気に入ったために、泉にとって大事で特別なものになったらしい。

大垣は悪くない男だ。だが、泉と別れる日が来たら、やっぱ俺は泉の味方で、必要なら奴も殴るんだろう。オーブントースターのタイマーが鳴った。後は磨くだけだ。
いつもの店で逢ったときにも大垣に渡そう。

【了】

黒孔雀は囚われる。 SIDE-S

発行:2014年03月09日

作画:純友良幸
原作:伊祖子久美

発行:a bullet.

<http://homepage2.nifty.com/cafetap/plastick.dog@gmail.com>

伊祖子久美さまのブログ
「雑音集積所」

<http://iso5kumi.blog.fc2.com/>
cantarella17@excite.co.jp

印刷会社:株式会社ポプルス





君を見る 染井吉野

「黒孔雀シリーズ」番外編

伊祖子 久美

俺の部屋に来るようになってからも、泉の方は何が変わったというのはない。

変わったとするなら俺の方だろう。

毎日使う最寄駅で降り、スーパーかコンビニに寄ってビールとつまみと、弁当を買って帰る。そんな普通のことなのに泉と一緒にいただけで息が苦しい。

それは勿論、嫌な訳じゃない。

生まれたばかりの仔猫を掌に置いたような気分だ。

思い切り抱きしめたり頬ずりしたりしたいけど、そうしたら猫が苦しんだり嫌がったり逃げたりするかもしれない。

それ以上に、下手に力を入れ過ぎると殺してしまうんじゃないかと思うから、手の中であたためて指先で耳の間や喉をそっと撫でるだけで我慢してるときに似ている。

泉とは普通とは違うきっかけでセックスする仲になった。好きだと言ったのも、唇にキスするようになったのも随分経ってからだった。一緒に飲みに行ったり、休日に遊びに行くようになったのは最近だ。

泉は俺が好きだと言うと喜ぶ。

けれど泉の態度は「いいんだよ、いつ別れても。都合が悪くなったときにはいつでも」と言っているように思えてならない。

泉が俺を友達に見せびらかしたり、殊更に俺に甘えたりするのは、いつか来る終わりを見ているから——そんな気がしてならない。

別に雑に扱われてる訳じゃない。寧ろ、泉は、これまでつきあったどんな女の子よりも気遣ってくれてる。俺が泉を大事にしようとする以上に細やかに、その癖さりげなく気遣ってくれるから、意識して優しくしよう、喜ばせようとする自分が無様なような気さえする。

たとえば、泉がしてくれるように、喉が渴いたと思ったらコーヒーをそっと置き、退屈だと思ったときにネットで拾った爆笑動画を送り——そして、ベッドの中で、ときにはして欲しいことをもう十分過ぎるというほど、別のときには、想像もしたことがないほど新鮮なことをしてやれるような恋人になりたい。

不意に、泉は反対側の歩道に目を遣った。

「綺麗だね」

フェンスの向こうには小さな児童公園がある。

休日の午前中から子供が大声で笑ったり泣いたりして、朝寝を邪魔されるが、夜には誰も出入りしない。

ささやかな外灯に桜が浮かび上がっていて、花びらが絶え間なく散っている。風がなくても桜は零れるように散るものらしい。

「桜も、もう終わりだね」

泉が言った。

この春はなかなか来なかった。四月に入っても冬はしつこく居座り続けて、やっと咲いた桜なのに、もう散り終わってしまおうとしている。

「最後のお花見してく？」

泉がそう言ったので、公園のベンチに座って、音もなく降りしきる桜の下で冷えたビールの栓を開けた。

泉は俺の頭のとっぺんに落ちた花びらをつまんで、指先をふっと吹いてそれを飛ばした。

泉の髪にも花びらが留まっている。

取ってやろうと思ったが、艶のある真っ黒な髪にとまった淡いピンクの花びらが綺麗なのでやめておいた。

どうせうちに着いたらシャワーを浴びるんだ。このままでいい。

「綺麗だね」

頭上を見上げて泉はまたそう言った。

ビールを一口飲んで、泉は俺の方を見た。

「俺の顔見てどうすんの？」

ああ——見惚れてた。

「桜、明日には全部散っちゃうよ？」

泉は笑う。

「いいよ。来年咲いたらまた見るから——お前と一緒に」

それは当然のことだという風に軽い調子で俺はそう言った。

泉が重いか鬱陶しいとか感じないように、努めて自然に、さりげなく——そう聞こえているだろうか？

俺は、来年も、再来年も、ずっとずっと先までお前と桜を見たいんだ——そう言って抱きしめてキスして、お前もそう思ってるだろう？

思ってくれ、と叫びたいのを堪える。

今は、なんでもないことのように響いているといい。

「——綺麗だね」

うっとりとして、幸せそうに俺の肩に凭れて、泉はまた言った。

【了】